

第 19 回高知市総合教育会議 議事録（概要版）

1 日 時 令和 6 年 2 月 13 日(火)
開会：午後 2 時 閉会：午後 3 時 30 分

2 開催場所 オータピア高知図書館 4 階ホール

3 出席者

(構成員)

高知市長	桑名 龍吾
高知市教育委員会 教育長	松下 整
委 員	谷 智子
委 員	西森 やよい
委 員	野並 誠二
委 員	森田 美佐

(市長事務部局)

総務部部長	林 充
政策企画課長	大宮 剛夫
政策企画課長補佐	守屋 好英
政策企画課主査	清遠 佳澄

(教育委員会事務局)

教育次長	山中 浩介
教育次長	植田 浩二
教育政策課長	岸田 正法
教育政策課長補佐	神岡 純子
教育政策課総務担当係長	栗本 佳美
学校教育課長	竹内 清貴
学校教育課副参事	川元 雅一
学校教育課教育企画監	市原 俊和
学校教育課学力向上推進室学力向上指導監	岩城 多加仁

4 議 題 学力向上対策

5 議事の経過

- 学力向上対策について、教育委員会事務局から資料に沿って説明。

- 議論

(桑名市長)

事務局からの説明では、国の動向や高知市の現状、生活課題、今後の取組が示され、また動画では、60校60通りのGIGAスクール構想に向け、各学校において教員が考え取り組んでいるということが示された。

このことをどう学力向上につなげていくのかという議論を深めていきたい。

(谷委員)

すっかりデジタル社会となり、私自身はスマホ一つとっても苦勞の連続であるが、子どもたちにとってはデジタルの活用は大事なことだと思いながら資料を拝見した。

先ほどのご説明について、考えが二点ある。

一点目は、デジタルを授業のどの場面でどのように活用することが効果的なのかということを徹底的に学校で研究し、学力向上の成果を出していかなければならないということである。それについては、市教委が良い提案をしてくれている。資料の9から12ページに社会科の授業の例が掲載されているが、9ページ左側にあるように、例えば、9時間の単元の授業である。一つのパッケージのようなものだが、授業は単元で考えることが大事である。この9時間の中で、子どもたちが段々と学びを深めていき、議論し、最後にまとめ、振り返りをするということが非常に重要である。授業の中で、いつどのようにデジタルを活用するか、各教科の教員が年間を通じ研究することが重要なことではないかと思うので、とても良い提案をしていると思った。

12ページに掲載されている英語の授業の例では、「前時に撮影した自分の動画を観ながら内容面と言語面の両面から発表内容を再考する。」とあり、児童が、動画によって自分を客観的に見、再考することで学びを調整することができる。私自身が過去に行っていたのがメタ認知というもので、ここまでは分かった、もっとこういうことを学んでいきたいというように、1時間の授業の中で子どもが自分で意識して客観的に考えることが学習にとって最も大事だと考え、取り組んできた。動画で見ることができれば、自分自身の行ったことや学びが客観的にはっきり見えるので、デジタルの良い活用方法だと思う。資料では、社会科と英語の例の中にこのことが散りばめられており、指針にできる内容であると思った。

二点目は、学校における実践についてである。資料のように60校が取り組んでいれば、どの学校も向上していくのだろうと思う。学校において、他の教育や様々な重要事項がある中で、デジタルを活用し効果的に確実に学力を上げる取組に対して、教員がやる気を持つことが大事である。やる気を持ってもらうため、学校だけでなく、教育委員会の支援の仕方やフォローが大事であり、必要である。

先ほど拝見した昭和小学校の例では、家庭と学校の勉強とを切れ目なくつなげられており感心した。また、浦戸小学校は、目の前が海で、津波は自分の生活に直結するものなので、そのことをデジタルを活用し学ぶことは非常に良い学習だと思う。また、春野中学校ではデジタルドリルを活用した授業が展開されているが、取り組む生徒からやる気のある声が聞かれ嬉しく思った。

一点質問したい。学校により取組に格差があるようだが、十分でない学校はどのぐらいあるのか。

(松下教育長)

デジタルもそうだが、教育行政で最も大きな問題の一つは学校間格差である。それぞれ得意な分野や進度の遅い分野はもちろんあるが、このデジタルに関しては乗り遅れることは許されないだろうと思う。校長会では毎回必ず時間を取り、私からも担当からも話をし、また先ほどの動画のように、学校の取組を視聴してもらう。校長には苦手意識のある人も多いため、そこを大事にしている。

また、これまでは、「デジタルであれば若い人」といったように、得意な人が取り組むことが多かったが、デジタル化への取組により、学校全体として、教員誰一人取り残さないという取組も同時に進めることができたと思える。教員は一人で業務や悩みを抱え込むことも多いが、デジタル化が進み、今まで教えてもらう立場だった若い教員が教えたり、逆にデジタルの苦手なベテラン教員が若い人に教えてもらったり、教員同士のコミュニケーションが増えた点は組織として良かったと思っている。

(桑名市長)

「世界青年の船」が浦戸小学校を訪れ、今朝私も迎えに行ってきた。各国の方々が来られ、子どもたちが大変喜んでおり、その現場に私も立ち合わせてもらった。「ウェルカムトゥーウラドエレメンタリースクール」の挨拶から始まり、子どもたちがデジタルを使い、「こんにちは」の挨拶を各国の言葉で作りに上げていた。子ども同士で共同して作成したのだが、先ほどの動画を見て、デジタルを活用した授業で身に付いたものが実践されたのだと改めて感じた。

デジタル化の学校間格差に対しては、現在、それぞれの学校が取り組んでいるが、教員間格差という問題もある。苦手な教員もいる中で、これをどういかしていくか。教員誰一人取り残さないという観点も大事だと思うが、教員の育成面で何か実施していることがあれば教えていただきたい。

(松下教育長)

苦手では済まないというのが大前提にはなる。やはり最初は、新しいことを加えられたという意識があり、人役がかかる、業務が増える、というようなイメージがあった。また、授業を行うに当たって、また子どもたちの学力を伸ばすに当たって、さらには子どもたち

の未来を保障するに当たって、デジタルが有効であるかどうかの確かめがここ2、3年であったが、どう考えても有効であるということが分かり、方向性が定まってきた。

デジタル化によって全く新しいことが入り込んできたというわけではなく、先ほど谷委員が言われたように、今まで取り組んできた良い授業というものが、デジタルを活用した授業の中にあるのだらうと思う。子どもたちが発想や学力を身に付け、次に進んでいくことをデジタルが助けてくれるということが、教員自ら使うことで分かってきた部分が大きい。

(西森委員)

最初にまず感想を申し上げる。GIGAスクール構想が着実に定着し、進化してきているという印象を持って、資料と動画を拝見した。

次に、一点確認しておきたい。資料3ページの右下に、「これからの学校には」から始まる一文があるが、このことは平成29年、30年に発見されたことではなく、日本国憲法で基本的人権の尊重をうたった時からずっとこの理念を持ってきたはずである。「これから」という表現が不思議だが、「これまでもそうだったが、これからはアプローチの方法や手法を変えてみよう」ということではないかと捉えた。その意味合いでよろしいか確認する。

そこで、アプローチや手法がどう変わったかといえばこのデジタルツールである。資料を見て思ったが、学校現場でのデジタルツールの役割を考えると、情報の収集、集約、表現、発信を容易にした点に非常に大きな意味があると思う。これまでの教育活動では、課題学習の形で実施されており、年に1回、または夏休みなどに、学校がその取組を促していた。ただ、情報収集するためには、例えば図書館に行くというように、子どもによって資料へのアクセスのしやすさに格差があり、しかもそれを模造紙にまとめ、みんなで共有するのはかなり大事業なので、有効だと分かっていながらできなかったのではないかと。これが、デジタルツールが入ったことで、教室にいながら瞬時に情報収集し、集約し、それを表現し共有することができるようになったので、これまでも有効だと認識されていた課題学習が容易になったのではないかと思う。それがデジタル化の非常に大きなところではないかと思う。今後は収集、集約、表現をどう授業でいかしていくのが大事になってくる。

次に、教員の役割について考えたい。先ほどご説明の中で、伴走者という言葉が出てきた。これまで教員というと、前で話し、点数を付けるといったように分かりやすかったが、例えば、今回の資料の車が走っている図で言うと、教員とは何をやるのだらうと思ってしまふ。教員が何をすべきか、その伴走者としての役割は次のような理解でいいのか。

まず、昭和小学校の例を見ると、発表し合うだけでなく、教員が議論に発展させ、しかもその中で反論した子どもはエビデンスに基づく反論をしていた。非常にきちんとした議論になっている。つまり、エビデンスに基づかず、思うことや主張だけを述べていたのでは、いつまでたっても発展的なものにならないが、教員が議論に発展させ、さらにエビ

デンスで議論するという仕掛けづくりをしているのだろうと感じた。浦戸小学校の例についても、対話と共有ということだったが、対話し、共有し、お互いそれを昇華させ、さらに発展させることができていた。ここでも、発表しつ放し、好き放題しゃべりつ放してはいる形ができていた。また、春野中学校では、思考力を鍛えたいということだったが、デジタルツールの使用により子どもたちが自分の調べ学習や表現がしやすくなった中で、どうそれを議論に発展させ、道筋のある持続可能な思考力に鍛え上げていくかが、今後の教員の役割ではないかと思った。そして、かつそれがすでに実践されていると、資料や動画を見て感じた。教員が伴走者として何をすべきかを今後議論する必要がある、また、教育委員会が色々な良い事例を提示する必要がある。エビデンスとは知識だと思うので、議論させる、エビデンスの重要さに気付かせる取組を進めることで、知識も自然に習得されていくのではないかと思う。

最後に、学力向上にどう結びつけるか。課題学習というのは膨大な作業がかかる割にテストで点数が付けられない。先ほど市長も言われたが、生きていく力を身に付けていくには、これからは、テストで暗記したことが解けたかどうかよりは、自分で考えることを積み重ねていく、その力を身に付けることが非常に大事だと思うので、今の方向性でいいのだろうと思う。

学ぶことが好きだということが堂々と言えるように育ててほしいと思う。今の日本では、勉強が好きだと言うと変わった人のように受け取られることが多く、勉強が苦手、体育や給食だけ好き、と言うと受けが良かったりする。しかし、学校では勉強してこなかったと言う方や最終学歴が中学や高校の方でも、社会に出、ご自身の仕事において様々な意味で学びを続け、大成功された方が多くいる。学ぶことが好きというのは絶対に悪いことではなく、今まで授業で受け身だった子どもたちが、「こういうことも学びなんだ」「学びが好きだ」と堂々と言えるように育てば、学力も上がってくるのではないかと思った。

(松下教育長)

教師が伴走者として何をするか。例えば昭和小学校の、あの单元だけ、あの授業だけではあのように絶対にならないのは当然である。全ての教育活動を通じ取り組むことで、根拠に基づいて議論し、人の意見を聞き、考え、自分の意見とどう調整するかを考えることができるのではと思う。恐らくこういった授業ができるということは、給食の時間や指導時間も含めた全ての学級活動において、意識して取り組んでいるのだろうと思う。

問題は教員間の比較である。例えば中学校に入り、英語の教員と数学の教員で取組が異なるのであれば、子どもに混乱を生じさせてしまう。これまで中学校においても取り組んできてはいるが、デジタル化により、一層学校全体として一つの方向性を持たなければならないという話になってきた。

テストについて一点お伝えしたい。中間テストや期末テスト、さらには高校入試や大学入試といったテストそのものが変わらなければ、子どもたちはこのような授業とは別に受験勉強をしなければならなくなる。こういった授業をやっていたのでは入試を突破で

きないということになってしまう。デジタル導入当時にはそういった話題になった。しかし現在では、入試自体が変わってきており、授業で身に付けたことが入試を突破する力にもつながっている。もちろん基礎学力があつてのことだが、それを身に付けながら、しかし暗記だけでは今の入試は突破できなくなっている。

(桑名市長)

探求型の授業というのは、知識がないとできない。デジタル機器を子どもたちが家庭に持ち帰り、色々なことを調べた上で授業に臨む。つまり、家庭と学校をつないでいるということである。知識も学べ、また議論することもでき、探求型の授業もできる、そういったことがデジタル化で可能になったということが昭和小学校のような例で分かってきたのだろうと思う。

(森田委員)

私がまず考えたことは、この高知において、なぜ子どもたちの力を最大限に引き出さなければならないのかということである。高知の少子化問題とも重なると思うが、それに対しては子どもの数を増やすという政策がある。しかし、子どもは少ないかもしれないが、少ないから問題ということではなく、その子どもたちがこれからどんな発想ができるか、どんな活躍ができるか、そこからアプローチする必要もある。少子化が問題ではないというつもりはないが、そのように考えた。

次に、何を学力向上と言うのかということである。これまでの学力とは、処理力の速さや、また、指示どおり時間内にできるかというような、人に習う、真似をするという受け身が必要だったのかもしれない。一方、今の学力とは、社会を変える力、新しい社会を創る力、新しい学問を拓いていく力、あるいは今あるものや見えているものを疑う力、その全てを言われているのではないか。新しいものを創るためには、人の話を聞き、要約し、ロジックの正誤を判断する。そうする中で気付きの基礎ができるので、必然的に、処理力などのこれまでの学力も身に付くのではないか。面白いことや対話的なことをやみくもにやっつけていいわけではなく、相乗効果で学力を向上させなければならないと考えると、いわゆる5教科の勉強も大切だが、市長が最初に言われた体力や食、睡眠、精神状態の安定といった5教科以外に力を入れていくことで、結果として、入試に勝つ力もできるのではないかと考える。

次に、デジタル化を進めることで、教員に高度な能力が必要になるのではないかとということである。今までのように黒板を使ったゆっくりとした授業であれば別だが、私自身が授業をする中で、学生に何か指示した後、何が何パーセントできているかと瞬時に判断するのは難しい。また、多くのデジタル教材がある中で、授業に有効なものをジャッジする力が必要で、教員も多くの勉強が必要だろう。それから、授業の雰囲気も重要である。雰囲気が悪い中で議論の指示をしても、子どもの気持ちがついてこない。子どもたち一人一人の気持ちに寄り添っていることを示す必要があるとすれば、やはり教員には高度な能

力が今以上に求められる。今、学問としてのデジタルの話をしているが、仕事の中でデジタルに任せられる部分、あるいは人にサポートをお願いすることも必要だと思った。

昔私のゼミに入っていた学生が現在小学校の教員をしており、年末に高知に帰ってきて話したことだが、授業以外にも業務量が多く、子どもに関わりたいが時間が取れないことが多々あるようである。例えば、集金やその後の計算をいまだに教員自ら行っているそうである。

それから、先日、私がある市の教員の集会に仕事で参加した際、壁の掲示物や手書きの封筒などの準備を教員が自分たちでされていた。まさに今日その場で議論する、その前にそういった事務作業が膨大な数あったということである。そういった面でサポートがあれば、教員が教員としての力を発揮でき、子どもたちを見る余裕も生まれるのではと思う。

(松下教育長)

昔と今を比較すると学校は忙しくなっており、サポートについては、日本中が抱えている課題である。

もっと子どもの対応に時間をかけたい、保護者の話も聞きたい、そのための準備をしたいという思いがある。デジタルを時間の有効活用のために上手く使えるのではないかとも思うし、使っている教員も中にはいるが、まだまだである。先ほど申し上げたように、デジタルは子どもたちの学力向上や生きる力を養うことには有効だと認め使っているが、教員の時間の有効活用にまで使うというのは本当に難しい。よっぽど上手く使えなければならず、まだまだである。

それから、何をもって学力というかであるが、市長の言った生きる力、生き抜く力だろうと思う。そのためにはどうするかということである。私は中学校の教員なので、生き抜く力という意味で言うと、高校入試や高校卒業のライセンスには大きな意味がある。高校入試が変わらないのに授業を変えることについては、現場にとって、ものすごく不信感があったが、まず大学入試が変わり、高校入試も変わったため、安心して授業ができるというのが現状である。

私は教育委員会の立場になったので、各学校が子どもに向き合う時間が持てるよう、補助金や予算確保にはもちろん取り組む。もう一つ、教員がどうすれば子どもと向き合う時間以外の時間を工夫できるのかについて、今後教育委員会としてのサポートを検討したい。

(野並委員)

本日の事務局の説明について、デジタルの活用がここまで進んでいるとは思っていなかったもので、大変驚きをもって拝聴した。特に春野中学校のA I型デジタルドリルを活用した取組については、それぞれの能力に合わせた達成感が得られるという部分が大変よくできていると思う。満点でなければならないわけではなく、ある時点でその達成感が得られる。それぞれの知識量に合わせた問題を解いていく仕組みが非常に素晴らしい。

何よりも、この動画を見ていると、子どもたちが楽しそうだった。それが最も大切なことであり、知識を得ることや知ることの喜びが伝わってくるが、それを備えた授業というのが最もすごいことである。それさえあれば、放っておいてもどんどん学力が向上するのではと思うが、なぜ学力向上につながらないのか。教育長が言われたように、ある授業だけではなく、他の授業でも同様にできなければならないという問題なのだろうと感じた。とにかくみんなが楽しそうで、自分の意見を言うこと、協力、協働、助け合いといったことが授業の中でできているのは非常に素晴らしいことである。それがもっと普及すればいいだけなので心配いらないように感じるが、普及に課題があるのか。

また、森田委員が言われたように、これからの学力の基準点がどうなってくるかということである。デジタルを活用する能力を求めるのか、本来それを求めているものかと思いきえし、AIを使うことによって極端に様々な方向に広がっていくので、果たして学力を問う基準そのものが今のままでいいのか、変わっていくのではないかという気さえする。逆に言うと、あまり心配する必要はないのではないか。基準そのものが変わっていくのであれば、今の取組がより広範囲に広がり、子どもたちに楽しさが広がっていくことが最も大切なことではないかと思う。

それからもう一点、小学校や中学校でのデジタル教育の前の段階について、以前もお話がこの場であったと思う。教育の前の段階、例えば話を聞くことができるかできないかというようなことである。幼稚園等から小学校に向けての取組となると、教育委員会の管轄外かもしれないが、前段の連携で、幼稚園等で様々取組をした上で小学校のデジタル活用教育へ向かうという流れも必要なのではないか。

(松下教育長)

保・幼・小の連携については、高知市は随分前から大事にしており、小1プロブレムはコロナ禍前にはほとんどないような状況だった。コロナ禍は教育に大きな影響があり、また少しずつ問題が出てきていたが、再び回復傾向にある。

まず、小学校と保育園の先生が話し合いを重ねてきた実績がある。春野東小学校区が文科省の指定を受け、こども未来部と共に取り組んでいる。小学校の教員からすると、連携は非常に大事な部分だと捉えている。お互いの状況を理解した上で、一緒になって、文科省が言う架け橋期のカリキュラムを作っている。

次に、小学校1年生でタブレットを使うことの是非についてである。漢字の書き取りや計算はアナログで子どもたち自らの筆圧でしっかりと行うということは譲れない。小1でタブレットが使えないかと言うとそんなことはなく、あえてそういった実践をしていると聞いている。

それから、自分の中で何かが分かったり、仲間と一緒に作業しながら授業が進むと、授業が楽しいということにつながり、授業が楽しければ明日も学校に行きたくなる。確かに運動会や音楽会が楽しいのも意義のあることだが、毎日5時間から6時間の授業が楽しいか、発見があるか、仲間と関わるができるかということが大事である。静かな教室

で教員が一人講義をしても、やはり子どもたちの中に入っていない。それをずっと分かっていたが、子どもをコントロールするという面も重視してきた。その意味で、デジタルはそれを打ち砕くものであり、これまで教員が本当はやりたいと思っていた授業を可能にしている。これがなければここまで進んでなかったのではないかと思う。デジタルが得意な学校のみが取り組むということではなく、高知市が、日本中が今一緒になって進めている。デジタルによって全く新しい考え方が入ってきたのではなく、元々教員が理想的に思っていた部分に触れるものがあつたのだろう。校長会では必ず、苦手だと言っている場合ではないと校長にプレッシャーをかけている。

(桑名市長)

デジタル活用と聞いた時、人と人との触れ合いが必要な中、これがまた閉ざされ、無機質な授業になるのではないかと思ったが、動画のように、逆に子どもたちが楽しく、デジタル機器を持って会話をしながら勉強する場面を確認した。

本日午前中に企業の方々と意見交換をした。各企業にとって、デジタル化の進め方や、そのための人材、費用が今一番の悩みである。しかし、今の子どもたちは、デジタルで何ができるかということがすでに分かっている。学ばなくても感覚的に分かってくると思うので、10年後、今の中学生が大人になる頃には、各企業に勤めている人たちが、その専門でなくてもある程度のことはできてしまうという時代が来るのではないかと思った。午前中は社長陣ばかりで大変だったが、ここに来たら解決ができるのではないかということに改めて確信した。今後子どもたちが学ぶ機会が一層増えることを期待したい。

(野並委員)

学力向上につなげるという観点について再度考えたい。結局は、このような授業そのものを広げていくことが一つの解決策になり得るのか。本日ご説明のあつた事例はごく一部であると捉え、それが十分広がっていないために学力向上につながっていないのか。

(松下教育長)

十分には広がっていない現状である。ご覧いただいた4校は、デジタルを有効的かつ効果的に使っている学校である。

授業を変えない限り、教員一人語りの一斉授業や、一人の意見を共有するだけの話し合いは変わらない。全ての子どもたちが意見を言え、しかも根拠を持って話をする必要がある。手段を身に付けることができれば根拠を見つけることができ、また、まだある暗記型テストにも立ち向かうことができる。講義式の授業やドリルを解くだけの授業では、子どもたちはついていけない。野並委員のご質問に答えられているかどうか分からないが、今私たちが取り組んでいることは学力向上に結びつくことと確信している。しかし、広く普及しているのかという点とまだまだである。これができれば、子どもたちの未来を切り開く学力が身に付くと確信している。

(桑名市長)

各委員から、それぞれの切り口でご意見をいただいた。教育長も言ったとおり、デジタルが全てではなく、バランスの問題だろうと思う。デジタルを使うところはデジタル、アナログを使うところはアナログというように、組み合わせを保ちながらバランスを取っていくことが、これから学校や教員が試される部分である。教育委員会として、しっかりと様々な事例を集め、また、教員を育てていかなければならないと改めて感じた。

最後に、どういった状況にあっても、一人一人の個性や能力をどう引き伸ばしていくかが今後教育に求められるので、教育委員会としても、市長としても、しっかりと注視しながら教育行政を進めていきたい。